V テイク・V テクルの多義性と統語*

日高 俊夫
九州国際大学・神戸松蔭言語科学研究所
t-hidaka[at]cb.kiu.ac.jp

Polysemy and Syntax of V-*teik* and V-*tek*

HIDAKA Toshio
Kyushu International University / Shoin Institute for Linguistic Sciences

Abstract

本論文では、V テイク・V テクルに関する先行研究の多義性分類森田 (1994); 澤田 (2013) をもとに、両形式の多義的な意味と統語構造の関係を議論する。本論が下敷きとする新井・日高 (2016) では、V テイクを移動用法とアスペクト用法に分け、前者では主要部移動によって V テイクが形成され Nakatani (2013)、後者では再分析 Hopper and Traugott (2003) が義務的で、テイクが 1 つの形態素として語彙挿入されるとする。本論は、新井・日高 (2016) に基づきつつ、分析対象を V テクルにも広げ、同じアスペクトを表す例においても、V テイクと異なり、対応する V テクルでは再分析が義務的でないものがあることと、移動を表す V テイク・V テクルの再分析に関する振る舞いの違いを指摘し、再分析における両形式の非対称性を記述する。

The present article discusses the relation between the polysemy of V-*teik/tek* (based on Morita (1994) and Sawada (2013)), and their syntactic structures. Arai & Hidaka (2016) propose different syntactic structures between V-*teik* which depicts motion and aspectual V-*teik*. Specifically, they argue that the former is formed by head movement while in the latter *te-ik* is inserted in the syntactic structure as a single morpheme by reanalysis Hopper and Traugott (2003). We extend our analysis to V-*tek* and demonstrate that aspectual V-*tek* shows different syntactic behavior than the corresponding V-*teik*: in the latter reanalysis is not necessarily

*本論の内容は日本言語学会第 155 回大会における発表内容を加筆・修正したものである。会場で質問・コメントをいただいた方々、司会の伊藤たかね先生に感謝申し上げます。本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C)「動詞の多義性と文法化の理論的記述・分析—命題的意味、非命題的意味、視点的意味—」(2016 年度〜2019 年度、研究代表者：日高俊夫、課題番号 16K02652) の助成を受けている。

acuated. We also point out a similar difference between the two forms both of which depict motion.

キーワード: 再分析、経路、着点、特質構造
Key Words: reanalysis, path, goal, Qualia Structure

1. はじめに

現代日本語における V テイク・V テクルについてはこれまで様々な分析がなされ、両形式の意味や共起する V に関する対照的分析森田 (1968); 吉川 (1976); 寺村 (1984); 今仁 (1990); 澤田 (2008) や形式的意味分析中谷 (2008); 日高・新井 (2012); Nakatani (2013) 等がある。統語構造に関わる分析としては、テイク/テクルの形態論的位置付けを議論した森山 (1988) やテ形複雑述語を分析した Nakatani (2013)、V テイクの統語構造を論じた新井・日高 (2016) がある。本論は、新井・日高 (2016) をベースとしながら、分析対象を V テクルにも広げ、両形式における多義性を対照させながら、統語構造との関係を議論する。

先行研究では、まず V テイクに関しては、例えば森田 (1994) が次のような分類を提示している。

(1) a. 移動を表す
　　i. 動作・行為の順次性を表す (集めて〜、洗って〜、言って〜、など)
　　ii. 平行して行うことを表す ((駅まで) 送って〜、抱いて〜、連れて〜、など)
　　iii. 移動するときの状態を表す (歩いて〜、泳いで〜、駆けて〜、など)
　　iv. 複合して 1 つの動作・作用を表す (上がって〜、降りて〜、落ちて〜、など)
　b. 時間的継続を表す (生きて〜、暮らして〜、忍んで〜、など)
　c. 消滅を表す (失われて〜、消えて〜、死んで〜、など)
　d. 変化を表す (変わって〜、(夜が) 明けて〜、薄らいで〜、など)

(森田, 1994, 90-96)

V テクルに関しては、澤田 (2013) の分類を挙げておく。

(2) a. 学校までバスに乗ってきた。 (同時移動)
　b. 家でご飯を食べてきた。 (継起移動)
　c. 太郎がアメリカから帰ってきた。 (移動の方向づけ)
　d. ヤクザが私を脅してきた。 (行為の方向づけ)
　e. 空が明るくなってきた。 (変化型アスペクト)
　f. 今日まで一人で店を切り盛りしてきた。(継続型アスペクト)
　g. 海が見えてきた。 (非意図的事象の出現)

澤田 (2013)

これらは、それぞれ V テイク、V テクルの記述的分類であるが、これらの基準によって分類されたものがそれぞれどのような統語構造を取るかについては具体的に議論されていない。

また、森田 (1968) はテイクとテクルの違いについて、次のような分析をしている。

(3) テクルは対象の変化が話し手の時点に向かってくる気分を表わすところから、言語主体に直接関係をもつ話し手側の問題 (たとえば利害をもつ事がらなど) として主観的にとらえ叙述するという意識が働く。テイクは対象が話し手から遠ざかっていく気分を表わすところから、言語主体に直接関係のない第三者の事がらとして距離をおいて客観的に眺めるという意識が働く。

(森田 (1968, 90), 太字は筆者)

澤田 (2008, 67) は「直示的方向性」のパラメータに加え「時間性」のパラメータを導入し、一般にアスペクト用法と考えられる例について両形式の違いを次のように述べている。

(4) 「変化型」アスペクトの「テクル」は、到着点側に立つ話し手の縄張りの中に事象が到来することを表すため、話し手は事象の「結果」を捉えることができるが、「変化型」アスペクトの「テイク」は、出発点側に立つ話し手の縄張りから際限のない彼方に向かって事象が進展することを表すため、話し手は事象の「結果」を捉えることができない。そのため、「テクル」と異なり、「テイク」は、(過去時に生じた) 事象の「結果」が現在時に存在していることを表す「現在完了」の「タ」とは相容れない。

以上のような先行研究を踏まえ、本論では、両形式の多義性と統語構造の関係を議論し、その過程で、森田 (1968) や澤田 (2008) の洞察を形式化していく。具体的方法としては、先行研究の分類を踏まえつつ、両形式について「移動」「到達」「アスペクト」を基準とした多義性分類に基づく振る舞いの違いを記述し、統語構造を考察する。

2. 本動詞イク・クルの多義性と意味構造：視点の違いに伴う着点の位置付けと活動継続の解釈

V テイク、V テクルの分析に入る前に、本動詞イク・クルの意味について検討する。特に本論において注目することは、両動詞における視点の違いに伴う、意味構造における「移動」と「到着」の意味合いの違いである。

2.1. イク・クルにおける着点

中谷 (2008) は、(5) の各文には「完結」の解釈しかなく、「活動継続」の意味には解釈されないことから、両動詞における「移動」の意味は「前提または言語規約的含意」であるとしている。

(5) a. 彼は公園に行っていた。

b. 彼は公園に来ていた。

しかしながら、両動詞については、以下のような違いがあると考えられる。

まず、着点句についてであるが、イクは着点句の表示が義務的であるのに対して、クルはそうではない。

(6) a. 健が*(駅に) 行った。
b. 健が (駅に) 来た。

これは、イクの着点は具体的に表示しない限り不明であるが、クルの着点は話者 (もしくは話者の視点保持者 (Empathy Focus; EF: Kuno and Kaburaki (1977)) のいる位置であると予め決まっているためであると考えられる。その着点を敢えて表示するのは「意味的に含意される要素が統語的に現れる」という「外部表示」影山・由本 (1997) に相当する。このため、クルの着点はイクのそれに比べて意味構造上の重要度が相対的に小さく、後に述べるように、移動と到達の間で自由に振舞う[1]。

2.2. 経路

経路表示についてはイク・クル共に同様の振る舞いを示す。(12)、(8) が示すように、両動詞共に経路を表示できるが、(9) は、経路と着点の双方を同時に表示することはできないことを示している。

(7) a. 健は中国自動車道を、ナオミは山陽自動車道を行った。
b. 健は中国自動車道を、ナオミは山陽自動車道を来た。

(8) a. この道を行けば駅に着きます。
b. この道を来たの？

(9) a. *健は九州自動車道を福岡に (やって) 来た。
b. *健は九州自動車道を福岡に行った。

2.3. 活動継続の解釈

両動詞共に経路表現については同様の振る舞いをするものの、活動継続の解釈に対しては異なる反応を示す。具体的には、次の例が示すように、イクが完結の解釈しかないのに対して、クルは活動継続の解釈が可能である。

(10) a. 特急電車が、今、大阪駅に行っている。(*活動継続[2] / ?完結)
b. 特急電車が、今、大阪駅に来ている。(?活動継続 / 完結)

[1]後述するように、アスペクト用法に関しても、クルはイクに比べて「アスペクト」と「(抽象的) 移動」の間を自由に行き来する。

[2]「自分の乗っている特急電車が」の解釈なら容認可能という話者もあった。これは、話者視点で、目的地が自明である場合に限られるように思われる。「*健が、今、大阪に行っている」のようにすると活動継続の解釈では容認不可能である。

c. もう電車が行っている。(*活動継続 / ?*完結)

d. もう電車が来ている。(活動継続 / 完結)

(11) a.?*健は、今、あっちに行っているところだ。(活動継続)

b. 健は、今、こっちに来ているところだ。(活動継続)

(12) a.?*健は、今、山陽自動車道を行っているところだ。

b. 健は、今、山陽自動車道を来ているところだ。

このような振る舞いから、両動詞共に経路を表示できるものの、その場合でも、イクが活動継続の意味をしにくいのに対して、クルは活動継続の意味を表しやすいということが言える。

以上のことをまとめると、本動詞のイク・クルについては次のようにまとめられる。

(13) a. イク：着点を表示しない場合は経路表示が可能だが、その場合でも活動継続の解釈は困難。

b. クル：着点、経路の表示が非義務的であり、活動継続の解釈が可能。

以上の観察をもとに、以下では本動詞イク・クルの意味表示を形式化するが、その前に、本論が立脚する意味表示について簡単に紹介しておく。

2.4. 意味表示のシステム

次に示す本論で用いる動詞の意味表示は、Pustejovsky (1995) の特質構造を含む意味表示を修正した Hidaka (2011) および Arai and Hidaka (2016) のものである[3]。

(14)
$$\begin{bmatrix} ARGSTR = [\text{統語構造における項}] \\ QUALIA = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: 時間的特性、視点に関する情報} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix} \text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態} \\ \text{TRIGGER: その動詞が成立するための外的要因} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

形式役割 (FORMAL) 中の「時間的特性」については、Igarashi and Gunji (1998) および郡司 (2004) の記述方法を用いる。

(15) s : 行為開始時点　f : 行為完了時点兼状態開始時点　r : 状態終了時点

a. 着る (状態変化動詞): $s < f < r$
($s < f$: *activity*　$f < r$: 行為完了時点で状態変化)

b. 死ぬ (瞬間動詞): $s = f < r = \infty$
($s = f$: *achievement*　$f < r$: 行為開始時点で状態変化)

[3]TS は命題的意味を構成する部門 (Truth Conditional Section)、NTS は非命題的意味を構成する部門 (Non-truth-conditional Section) を表す。

c. 歩く (継続動詞): $s < f = r$
($f = r$: 状態変化なし、行為完了時点がそのまま状態終了時点)

s, f, r は、それぞれ、「行為開始時点」「行為完了時点兼状態開始時点」「状態終了時点」を表す。s, f 間の「<」は、開始から完了まで時間幅が存在することを表し、「$s = f$」は、行為開始時点と状態開始時点が同時 (いわゆる瞬間動詞) であることを表す。f, r 間の「<」は、行為完了時点で状態変化があることを示し、$f = r$ は状態変化がないことを表す[4]。

以上、本論が立脚する意味表示を概観した。以下では、本動詞イク・クルの意味の形式化を提示する。

2.5. イクの視点と意味構造

次の図は、Arai and Hidaka (2016) で提示された、イクの視点を表した図である。

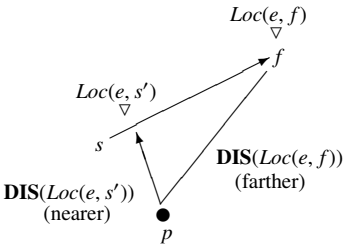

図 1: **DIS** of *ik* ‘go’.

重要な点は、イクは移動の終結点よりも目撃地点 (時点) の方により近い点から話者 (の EF) が視点をとっていればよく、必ずしも開始点や対象物の位置そのものから見る必要はないということである。このことと、上述のイクの振る舞いから、本動詞イクについて次のような意味表示が想定できる。

(16)
$$\begin{bmatrix} ik_1 \text{ (到達)} \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x, \ \text{ARG2: } z \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} TS = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: } \begin{bmatrix} \boldsymbol{s = f}, \\ \textbf{DIS}(\text{Loc}(e, s')) < \textbf{DIS}(\text{Loc}(e, f)), \\ \textbf{POV}(p)\text{: } \textbf{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s') \end{bmatrix} \\ \text{CONST: } \quad \text{BECOME-BE-AT } (x, z_{\text{place}}) \end{bmatrix} \\ NTS = \begin{bmatrix} \text{TRIGGER: GO } (x, \text{VIA } (y)) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

(17)
$$\begin{bmatrix} ik_2 \text{ (移動)} \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x, \ \text{ARG2: } y \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} TS = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: } \begin{bmatrix} \boldsymbol{s = f}, \\ \textbf{DIS}(\text{Loc}(e, s')) < \textbf{DIS}(\text{Loc}(e, f)), \\ \textbf{POV}(p)\text{: } \textbf{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s') \end{bmatrix} \\ \text{CONST: } \quad \text{GO } (x, \text{VIA } (y)) \end{bmatrix} \\ NTS = \begin{bmatrix} \text{TELIC: BECOME-BE-AT } (x, z_{\text{place}}) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

[4]Igarashi and Gunji (1998)、郡司 (2004) では、r の後に行為前状態への復帰の有無を表すさらなる表示があるが、本論と直接関係を持たないので省略してある

(16) が到達、(17) が移動のイクをそれぞれ表している。FORMAL の値はイクが瞬間動詞であることと、イクの視点、つまり「移動の終結点よりも目撃地点 (時点) の方により近い点 (**DIS**(Loc(e, s')) < **DIS**(Loc(e, f))) から話者 (の EF) がその時点で対象物の存在する位置 (Loc(e, s')) に視点を置く」ということを表している。

ところで、(16) は、FORMAL の値 ($\boldsymbol{s} = \boldsymbol{f}$) は瞬間動詞であることを示し、それは、CONST の値 (BECOME-BE-AT (x, z_{place})) とも何ら矛盾しない。それに対して、(17) では、CONST の値が GO (x, VIA (y)) という、通常アテリックとして解釈されるものになっているにもかかわらず、FORMAL の値 ($\boldsymbol{s} = \boldsymbol{f}$) は、「瞬間動詞」として登録されていることを示し、一般的に考えると矛盾が生じている。しかしながら、このことにより、上述の、「経路は取れるが、その場合活動継続の解釈が困難である」という一見矛盾した振る舞いを記述していることになる。なお、テイクの形で用いられる補助動詞のイクの場合は FORMAL の値が $\boldsymbol{s} < \boldsymbol{f}$ となり、「健は今その道を走って行っている」のように活動継続の解釈が可能になると想定する。

2.6. クルの視点と意味構造

本動詞クルの意味構造は次のように想定する。

(18)
$$\begin{bmatrix} k_1\ (\text{到達}) \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x,\ \text{ARG2: } z \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} TS = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: } \begin{bmatrix} \boldsymbol{s} = \boldsymbol{f}, \\ \textbf{DIS}(\text{Loc}(e, f)) = 0 \\ \textbf{POV}(p)\text{: } \textbf{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s') \end{bmatrix} \\ \text{CONST: } \quad \text{BECOME-BE-AT } (x, z_{\text{place}}) \end{bmatrix} \\ NTS = \begin{bmatrix} \text{TRIGGER: GO } (x, \text{VIA } (y)) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

(19)
$$\begin{bmatrix} k_2\ (\text{移動}) \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x,\ \text{ARG2: } y \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} TS = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: } \begin{bmatrix} \boldsymbol{s} < \boldsymbol{f}, \\ \textbf{DIS}(\text{Loc}(e, f)) = 0 \\ \textbf{POV}(p)\text{: } \textbf{POINT}(e) = \text{Loc}(e, s') \end{bmatrix} \\ \text{CONST: } \quad \text{GO } (x, \text{VIA } (y)) \end{bmatrix} \\ NTS = \begin{bmatrix} \text{TELIC: } \quad \text{BECOME-BE-AT } (x, z_{\text{place}}) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

FORMAL の視点を表す値 (**DIS**(Loc(e, f)) = 0) は、イクと異なり、クルは話者 (の EF) が移動の終着点そのものから対象の存在する位置を眺める (**POINT**(e) = Loc(e, f)) 必要があることを示している。このことは、(20) で、観察者が駅から離れたところにいる場合はクルが使えないことから裏付けられる。

(20) { 駅の入り口にいる/*駅から離れたビルの２階にいる } ナオミには、
健が駅に (やって[5]){ 来る / 来ている (活動継続)} のが見えた。

以上、本動詞イク・クルの多義性を検討した。まとめると、両動詞共に到達、移動の間で多義性を持つが、クルが純粋に継続活動としての移動を表せるのに対して、イクの

[5]「やって」は「遣る」に由来するが、現代日本語では、移動を表すクルを選択する接頭辞 (語) として分析できるかもしれない。

移動用法は移動でありながらも瞬間動詞としての性質を示すということになる。つまり、クルの方がより純粋な「移動」としての性質を強く持つということが窺われ、そのことが、後述するように、V テクルという複雑述語になった場合もクルが再分析に関しても比較的柔軟な振る舞いを示すことにつながるものと考えられる。

3. 新井・日高 (2016)：V テイクの統語構造

以下では、V テイク・V テクルの多義性と統語構造の関係を議論するが、その前に、本論が下敷きとする、V テイクの統語構造を分析した新井・日高 (2016) を概観する。

新井・日高 (2016) は、次のテストをもとに、(動詞句の統語派生では) 文法化によって主要部移動が抑制されるという立場 Roberts and Roussou (2003) から、文法化の進んだアスペクト用法では、イクの主要部移動[6](V-to-Deix Movement) Nakatani (2013) が抑制され、意味的に弱化したテとイクが再分析 (reanalysis) Hopper and Traugott (2003) され、機能範疇 DeixP Nishigauchi (2014) の主要部を成し、VP 補部を取ると考える。つまり、アスペクト用法では再分析によりテイクが 1 つの形態素として統語派生に導入され、移動用法ではその再分析が随意的に起こっているとする[7]。

(21) a. **V** のみの否定：
走らないで行った / (?) 走って行かなかった (移動)
*溶けないで行った / 溶けて行かなかった (アスペクト)

b. 尊敬語化：
走ってお行きになった / (?) お走りになって行った (移動)
*増やしてお行きになった / お増やしになっていった (アスペクト)

c. テを跨いだ **NPI** の認可：
どこも走らないで行った / (?) どこも走って行かなかった (移動)
*全く消えないで行った / 全く消えて行かなかった (アスペクト)

d. イクの選択的修飾：
走って急いで行った / (?) 急いで走って行った (移動)
次第に消えて行った / *消えて次第に行った (アスペクト)

移動用法ではイクが本動詞同様移動を表す点で文法化が進んでおらず、イクに対して VP_2 から DeixP への主要部移動が適用される。また、移動用法の一部ではテが意味的に弱化していると考えられ、この場合、イクに加えてテも DeixP の主要部へ移動するとすれば、アスペクトを表す V テイクに近い容認性を示す説明がつく。ゆえに義務的再分析を被るアスペクト用法は (22b)、随意的再分析を被る移動用法は (22a) あるいは (22c) の統語構造を持つ。

[6]Hayashi and Fujii (2015) は「ピザを作ってもらう」のような構文で主要部移動が発動されることを論じている。本発表では、テイク・テクル構文においても同様の主要部移動がなされるものが一部あることを主張することになる。

[7]容認性判断における「(?)」は、話者によっては容認性が下がることを示す。

(22) a. 移動を表す V テイク:

$\ldots$ Speaker/EF$_i$ $\ldots$ [$_{\text{DeixP}}$ *pro*$_i$ [$_{\text{Deix'}}$ [$_{\text{VP2}}$ [$_{\text{TP}}$ V-*te*] t_j] *ik*$_j$]]

b. アスペクトを表す V テイク:

$\ldots$ Speaker/EF$_i$ $\ldots$ [$_{\text{DeixP}}$ *pro*$_i$ [$_{\text{Deix'}}$ [$_{\text{VP}}$ V] *te-ik*]]

c. 中間型 V テイク:

$\ldots$ Speaker/EF$_i$ $\ldots$ [$_{\text{DeixP}}$ *pro*$_i$ [$_{\text{Deix'}}$ [$_{\text{VP2}}$ [$_{\text{TP}}$ V-t_k] t_j] *te*$_k$-*ik*$_j$]]

(21) のテストのうち (21b,d) は、意味的な要因による容認性低下の可能性を否定できないため、以下では、統語構造を探るテストとして (21a,c) を用い、多義性と統語構造の関連を分析する。

4. 多義性と再分析

4.1. テイク・テクルの分類：着点と経路表現に着目して

先行研究の分類を踏まえ、着点と経路表現に着目して、本論では便宜上次のような分類を行う。

(23) a. 継起移動 **1** (「V した後、イク/クル」; 着点あり)：食べて〜、飲んで〜
健は、今朝、学校にちゃんと朝食を食べて { 行った / 来た }。

b. 継起移動 **2** (「V の結果状態としての付帯状況」; 着点あり)：
持って〜、買って〜
ナオミはパーティーにローストビーフを買って { 行った / 来た }。

c. 継起移動 **3** (着点なし)：食べて〜、飲んで〜、寄って〜
健はその店でラーメンを食べて { 行った / 来た }

d. ながら移動 (V の行為を道中継続する解釈；着点なし)：
読んで〜、話して〜、(音楽を) 聴いて〜
健は発表会場まで新聞を読んで { 行った / 来た }。

e. **V** が移動様態動詞 **1** (経路あり/着点なし)：
〜を歩いて〜、〜を走って〜、〜を這って〜
健はその道を歩いて { 行った / 来た }。

f. **V** が移動様態動詞 **2** (経路なし/着点あり)：
〜に歩いて〜、〜に走って〜、〜に這って〜
健はその場所に歩いて { 行った / 来た }。

g. 行為の方向づけ (V テイクにはない)：
(手紙を) 送って来る、殴って来る、脅して来る
*健は友人に本を送って行った。/ 友人がワインを送って来た。

h. 非意図的事象の出現 (V テイクにはない)：
海が見えて来る、笛の音が聞こえて来る
*海が見えて {*行った / 来た }。

i. 継続：健は、質素に暮らして { 行った / 来た }。

j. 変化：極地の氷が溶けて { 行った / 来た }。

以下、この分類に基づいて (21a,c) のテストをかけてみる。まず、(21a) に関して検討する。

4.2. V を跨いだ否定要素の認可

(24) より、一見、両形式とも着点を取ることができるように見えるが、「その場所に」のような純粋な場所としての着点が表示された場合、V テクルが問題なく容認されるのに対して V テイクは容認性が落ちる。このことから、純粋な着点を取る移動動詞としての V テイクは再分析が不可能であるのに対して、V テクルでは再分析が可能であると言える。なお、(24a) が示すように、V テイクも「友達との待ち合わせに」等といったイベント的な名詞句の場合は問題なく容認されるが、これはニ格名詞句が「場所」ではなく「目的」を表していることを示唆している。「パーティーに」や「学校に」等も純粋な場所というよりも目的を表すと考えられ、その場合、両形式とも容認性は変わらない。これまでの研究では、それらの違いが区別されてこなかったため、V テイクと V テクルが並行的に論じられることも多かったのではないかと思われる。

(24) 継起移動 **1** (「V した後、イク/クル」; 着点あり)：食べて〜、飲んで〜

a. 健はその場所に何も {?*食べて行かなかった / 食べないで行った }。
健は待ち合わせ場所に何も {?食べて行かなかった / 食べないで行った }。
健は { 友達との待ち合わせ / 大事な試合 } に何も { 食べて行かなかった / 食べないで行った }。

b. 健はその場所に何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は待ち合わせ場所に何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は { 待ち合わせ/大事な試合 } に何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。

また、(25) が示すように V テクルの方がより与格構文としての容認性が高いが、このことは、クルの着点が話者 (の EF) のいる地点であることから、受益者 (人) として解釈されやすいことに起因していると考えられる。

(25) 継起移動 **2** (「V の結果状態としての付帯状況」; 着点あり)：
持って〜、買って〜

a. ナオミはその場所に何も {?*買って行かなかった / 買わないで行った }。
ナオミは実家の弟に何も {?買って行かなかった / *買わないで行った }。
(与格構文)
ナオミはパーティーに何も { 買って行かなかった / 買わないで行った }。

b. ナオミはその場所に何も { 買って来なかった / 買わないで来た }。
ナオミは私に何も { 買って来なかった /*買わないで来た }。(与格構文)
ナオミはパーティーに何も { 買って来なかった / 買わないで来た }。

継起移動の場合も、V テクルに比べて V テイクは容認性が落ちることから、V テイクの方がやや再分析が難しいことが窺われる[8]。

(26)　継起移動 **3** (着点なし)：食べて〜、飲んで〜、寄って〜

a. 健は、その店で何も {?食べて行かなかった / 食べないで行った }。

b. 健は、その店で何も { 食べて来なかった / 食べないで来た }。

「ながら移動」でも V テイクの方が再分析されにくい振る舞いを示す。

(27)　ながら移動 (V の行為を道中継続する解釈；着点なし)：
読んで〜、話して〜、(音楽を) 聴いて〜

a. 健は、道中、何も {?*読んで行かなかった / 読まないで行った }。

b. 健は、道中、何も { 読んで来なかった / 読まないで来た }。

V が移動容態動詞の場合は、(28)(29) が示すように、両形式とも再分析されないことが示唆される。

(28)　**V** が移動様態動詞 **1** (経路あり/着点なし)：
〜を歩いて〜、〜を走って〜、〜を這って〜

a. 健はそのコースのどこも {?*歩いて行かなかった[9] / 歩かないで行った }。

b. 健はそのコースのどこも {?*歩いて来なかった / 歩かないで来た }。

(29)　**V** が移動様態動詞 **2** (経路なし/着点あり)：
〜に歩いて〜、〜に走って〜、〜に這って〜

a. 健はどの場所にも {?*走って行かなかった[10] / 走らないで行った }。

b. 健はどの場所にも {?*走って来なかった / 走らないで来た }。

以上、移動用法の V テイク・V テクルについて概観した。次に、移動以外の用法について検討する。まず、(30) が示すように、「行為の方向づけ」はアスペクト用法と同様に再分析が義務的であることから、(行為の) 移動というよりもアスペクトに近いことが示唆される。

(30)　行為の方向づけ (**V** テイクにはない)：
(手紙を) 送って来る、殴って来る、脅して来る
健が僕に何も { 送って来なかった / *送らないで来た }。

[8](26a) において「何も」に対照強勢を置いて読むと問題なく容認されるように思われるが、この場合、本論の主旨からすると再分析が起こっていることになる。このような、強勢と再分析の具体的関係については今後の課題としたい。

[9]VP 全体の否定、つまり「健は移動しなかった」の意味であれば容認可能なように思われ、それは「歩いて来る」の場合も同様である。

[10]VP 全体の否定は容認可能なように思われる。また、V のみの否定も「走って」に対照強勢を置けば可能であるが、通常の韻律ではその解釈は難しい。

また、(31) から、「非意図的事象の出現」においても再分析が義務的であると考えられる。

(31) 非意図的事象の出現 (**V** テイクにはない)：
視界には何も { 見えて来なかった / *見えないで来た }。

(32), (33) では、「継続」「変化」のクルは再分析が非義務的である振る舞いを示すことから、イクがアスペクト補助動詞と化しているのに対して、クルは補助動詞でもあるが、抽象的 (時間上の) 移動を表す本動詞でもあるという多義性を備えていることが示唆される。このこともクルが活動としての移動を表しやすいことから導出する。

(32) 継続：(暮らして〜)
a. 健は全然 { 質素に暮らして行かなかった / *質素に暮らさないで行った[11]}。
b. 健はこれまで全然 { 質素に暮らして来なかった / 質素に暮らさないで来た }。

(33) 変化：
a. 極地の氷は (何万年もの間) まったく { 溶けて行かなかった / *溶けないで行った }。
b. 極地の氷は (これまで) まったく {?*溶けて来なかった/ 溶けないで来た }。

4.3. V のみの否定解釈

V のみの否定解釈のテストについても、概ね前節と同様の結果が得られる（ここでは結果のみを示し、次節で前節の内容と共にまとめ、考察する）。

(34) 継起移動 **1** (「V した後、イク/クル」; 着点あり)：
食べて〜、飲んで〜
a. 健はその場所に朝食を {?*食べて行かなかった / 食べないで行った }。
健は待ち合わせの場所に朝食を {?食べて行かなかった / 食べないで行った }。
健は、{ 友達との待ち合わせ / 大事な試合 } に朝食を { 食べて行かなかった / 食べないで行った }。
b. 健はその場所に { 朝食を食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は待ち合わせの場所に朝食を { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は、{ 待ち合わせ / 大事な試合 } に朝食を { 食べて来なかった / 食べないで来た }。
健は朝食を { 食べて来なかった / 食べないで来た }。

(35) 継起移動 **2** (「V の結果状態としての付帯状況」; 着点あり)：
持って〜、買って〜

[11]「これからは決して質素に暮らさないで行こう」のように、意図性の意味が読み取れる場合は容認可能であるが、これは、「この手で行こう」等の「行く」等と同様、「アスペクト」ではなくむしろ「抽象的な移動」のように分析されるべきと考えられるが、詳細な分析は今後の課題としたい。

a. ナオミはその場所にお土産を {?*買って行かなかった/ 買わないで行った }。
ナオミは叔母に酒を {?買って行かなかった / *買わないで行った }。(与格構文)
ナオミはパーティに酒を { 買って行かなかった / 持たないで行った }。

b. ナオミはその場所にお土産を { 買って来なかった / 買わないで来た }。
ナオミは僕に酒を { 買って来なかった /*買わないで来た }。(与格構文)
ナオミはパーティに酒を { 買って来なかった / 買わないで来た }。

(36) 継起移動 **3** (着点なし)：食べて〜、飲んで〜、寄って〜

a. 健は、そこでお昼ご飯を {?食べて行かなかった / 食べないで行った }。

b. 健は、そこでお昼ご飯を { 食べて来なかった。/ 食べないで来た }。

(37) ながら移動 (V の行為を道中継続する解釈；着点なし)：
読んで〜、話して〜、(音楽を) 聴いて〜

a. 健は、道中、その雑誌を {*読んで行かなかった / 読まないで行った }。

b. 健は、道中、その雑誌を {?読んで来なかった / 読まないで来た }。

(38) **V** が移動様態動詞 **1** (経路あり/着点なし)：
〜を歩いて〜、〜を走って〜、〜を這って〜

a. 健はそのコースを {*歩いて行かなかった / 歩かないで行った }。

b. 健はそのコースを {*歩いて来なかった / 歩かないで来た }。

(39) **V** が移動様態動詞 **2** (経路なし/着点あり)：
〜に歩いて〜、〜に走って〜、〜に這って〜

a. 健は大阪駅に {?*歩いて行かなかった / 歩かないで行った }。

b. 健は大阪駅に {?*歩いて来なかった / 歩かないで来た }。

(40) 行為の方向づけ (**V** テイクにはない)：
(手紙を) 送って来る、殴って来る、脅して来る
友人が本を { 送って来なかった / *送らないで来た }。

(41) 非意図的事象の出現 (**V** テイクにはない)：
海が { 見えて来なかった/ *見えないで来た }。

(42) 継続：

a. 健は、{ 質素に暮らして行かなかった/ *質素に暮らさないで行った }。

b. 健はこれまで { 質素に暮らして来なかった / 質素に暮らさないで来た }。

(43) 変化：

a. 極地の氷は (何万年もの間) まったく {?溶けて行かなかった[12] / *溶けないで行った }。

b. 極地の氷はこれまでまったく {?溶けて来なかった / 溶けないで来た }。

5. まとめと考察および課題

これまでのテストから、次の表のような結果が得られる (「V 分離」とは、例えば「走らないで行く」「*溶けないで行く」のように否定表現によって V とテイクが分離可能かどうかを示している)。

表 1: V テイク・V テクルの多義性と統語テスト

	V を跨いだ NPI 認可		V のみの否定解釈		再分析	
	V テイク	V テクル	V テイク	V テクル	V テイク	V テクル
a. 継起移動 1 (着点あり)	?* (V 分離)	√ (V 分離)	?* (V 分離)	√ (V 分離)	*	optional
b. 継起移動 2 (付帯状況; 着点あり)	?* (V 分離)	√ (V 分離)	?* (V 分離)	√ (V 分離)		
c. 継起移動 3 (着点なし)	? (V 分離)	√ (V 分離)	? (V 分離)	√ (V 分離)	optional?	optional
d. ながら移動 (着点なし)	?* (V 分離)	√ (V 分離)	?* (V 分離)	√ (V 分離)	*	optional
e. V: 移動容態動詞 1 (経路句あり)	?* (V 分離)	?* (V 分離)	* (V 分離)	* (V 分離)	*	*
f. V: 移動容態動詞 2 (着点句あり)	?* (V 分離)	?* (V 分離)	?* (V 分離)	?* (V 分離)		
g. 行為の方向付け	–	√ (*V 分離)	–	√ (*V 分離)	–	obligatory
h. 非意図的事象の出現	–	√ (*V 分離)	–	√ (*V 分離)		
i. 継続	√ (*V 分離)	√ (V 分離)	√ (*V 分離)	√ (V 分離)	obligatory	optional
j. 変化	√ (*V 分離)	√ (V 分離)	? (*V 分離)	? (V 分離)		

(√: 容認可 / –: 元々用法が存在しない)

[12] この容認性低下は「溶けなかった」と言えばいいだけでイクが意味的に余剰であるためであると考えられる。(43b) に関しても同様。

表 1 の結果は次のように解釈される。

(44) a. 各テストに通るものは再分析が可能である。
b. その中で V 分離が可能なものは再分析が随意的 (optional) である。
c. 各テストに通り、かつ V 分離が不可能なものは再分析が義務的である。

これを表にすると、次の表が得られる。

表 2: V 分離・統語テストと再分析の関係

	Pass	Unpass
V 分離可	随意的再分析	再分析不可
V 分離不可	義務的再分析	

右下の欄は、V 分離もできす、統語テストも通らないということであるが、これは次のようなパターンである。

(45) *V て行かなかった / *V ないで行った。

しかし、通常 V テイクの形を否定する場合は、(45) のどちらかのパターンを取るので、実際には、この右下の欄に相当するものは存在しない。

これまでの結果を再分析の有無を基準にまとめなおしたものが次の表 3 である。

表 3: V テイク・V テクルの多義性と再分析

	V テイク	V テクル
再分析不可	継起移動 1 (その場所にご飯を食べて行く) 継起移動 2 (その場所に土産を買って行く) ながら移動 (駅までその本を読んで行く) 移動容態動詞 1 (その道を歩いて行く) 移動容態動詞 2 (大阪駅に歩いて行く)	移動容態動詞 1 (その道を歩いて来る) 移動容態動詞 2 (大阪駅に歩いて来る)
随意的再分析	?継起移動 3 (そこで昼食を食べて行く)	継起移動 1 (その場所にご飯を食べて来る) 継起移動 2 (その場所に土産を買って来る) 継起移動 3 (そこで昼食を食べて来る) ながら移動 (駅までその本を読んで来る) 継続 (暮らして来る) 変化 (溶けて来る)
義務的再分析	継続 (暮らして行く) 変化 (溶けて行く)	行為の方向付け (本を送って来る) 非意図的事象の出現 (海が見えて来る)

表 3 から、次のことが考えられる。

(46) a. 移動用法全体としては，V テクルの方が再分析を受けやすい。
b. 同じ継起移動でも両形式の再分析の可能性は異なり、V テクルの方が再分析を受けやすい。
c. V が移動容態動詞の場合は V テイク・V テクル共に再分析を受けない。
d. ながら移動の場合、V テイクが再分析を受けないのに対して、V テクルは再分析が可能である。
e. アスペクト的な「継続」「変化」については，V テクルの方がより柔軟な振舞いを示し，アスペクトとしても (抽象的) 移動としても解釈可能であるのに対して，V テイクは専らアスペクト補助動詞として振舞うことを示唆している。
f. 「行為の方向付け」「非意図的事象の出現」のテクルは、再分析が義務的であることから、移動というよりもアスペクトとしての振る舞いを示すと言える。このことは、この２つを別々の用法とする根拠は薄く、クルそのものが２つの異なる意味を持っているのではなく、見かけ上の意味の違いは共起する V に由来するものと考えられる。

以上からまとめると、(46a,b,d) が示すように、移動用法では V テクルの方が再分析を受けやすい (つまり文法化が進んでいる) 一方で、アスペクトと考えられる例においては V テイクの方が義務的に再分析を受ける (つまり文法化が進んでいる) という、移動用法とアスペクト用法で文法化に関して相反する結果を示している。その明確な原因については今後の課題としたいが、移動用法に関して両形式共に再分析が可能であるのが「継起移動 3」であり、これは着点も経路も表示しない例である。(13) でも述べたように、クルは本来的に着点も経路も表示する必要がない。この、言わば意味の「軽さ」が再分析を受けやすい原因になっているのではないだろうか。

一方で、(46e) が示すように、継続・変化を表すアスペクト用法の場合は、V テイクが再分析が義務的であるのに対して、V テクルは随意的である。つまり、テイクがアスペクト補助動詞として文法化しているのに対し、テクルは (抽象的) 移動を表す本動詞としても機能することになるが、これも同じくクルの「軽さ」が原因になっていると考えられそうである。つまり、クルはその意味の軽さゆえにアスペクト用法と移動用法の間の違いがイクのそれよりも少ないため、両用法の間を柔軟に行き来できるものと考えられる。その一方で、イクは移動用法とアスペクト用法の間で明確な違いがあり、少なくとも共時的には移動用法のイクとアスペクト用法のテイクが別の語彙としてレキシコンに登録されていることが示唆される。

参考文献

Arai, Fumihito and Toshio Hidaka (2016) A formal analysis of Japanese V-*yuku* and its grammaticalization. *Japanese/Korean Linguistics* 23.

Hayashi, Shintaro and Tomohiro Fujii (2015) String vacuous head movement: The case of *V-te* in Japanese. *Gengo Kenkyu* 147, 31–55.

Hidaka, Toshio (2011) Word formation of Japanese V-V compounds. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.

Hopper, Paul J and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*: Cambridge University Press.

Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji (1998) The temporal system in Japanese. In: Gunji, Takao and K. Hashida (eds.) *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, 81–97: Kluwer.

Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry* 8, 627-672.

Nakatani, Kentaro (2013) *Predicate Concatination: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*: Kuroshio Publishers.

Nishigauchi, Taisuke (2014) Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23 2, 157–206.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*: MIT Press.

Roberts, Ian and Anna Roussou (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*: Cambridge: Cambridge University Press.

今仁生美 (1990) 「V テクルと V テイクについて」『日本語学』 9-5: 54-66.

中谷健太郎 (2008) 「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」『レキシコンフォーラム』4: 63-89.

澤田淳 (2008) 「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性–タ形「テキタ」と「テイッタ」の非対称的な分布に注目して」『日本語の研究』4-4: 63-69.

澤田淳 (2013) 「日本語ダイクシスの歴史的展開–「V て来る」の拡張パターンを中心に–」『平成 24 年度科学研究費による国際モダリティワークショップ–モダリティに関する意味論的・語用論的研究–発表論文集』第 4 巻: 1-20.

郡司隆男 (2004) 「日本語のアスペクトと反実仮想」 *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 7: 21–34.

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院.

吉川武時 (1976) 「現代日本語のアスペクトの研究」金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.

影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社出版.

日高俊夫・新井文人 (2012) 「「V テイク」の意味と派生について」『日本言語学会第 145 回大会予稿集』: 352-357 日本言語学会.

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.

新井文人・日高俊夫 (2016) 「V テイクの再分析に関する統語論的考察」 *KLS* 36: 1-12.

森田良行 (1968) 「『行く・来る』の用法」『国語学』 75: 7587.

森田良行 (1994) 『動詞の意味論的研究』

（受付日: 2018 年 1 月 10 日）